

パジャジャラン大学日本語学科での川柳実践

—想いを 17 音で表現する—

片山 恵

要 旨

本稿では、SEND プログラムにてインドネシア国立パジャジャラン大学人文学部日本語学科で行った「川柳」をトピックとした日本語教育実践を報告する。本実践は 1 回完結型の実践であり、「川柳」を理解し、自分の気持ちや想いを「川柳」を通して表現することを目標に行われた。渡航前の準備に加え、派遣中、実践前の学生間の交流を通して現地での気づきを実践に組み込むことによって、インドネシア人の学生にわかりやすい感覚で「川柳」を理解できるように工夫した。その結果、多様で個別的な「川柳」が作品として生まれ、日本への興味関心の高まりが見受けられた。

キーワード

SEND プログラム インドネシア 川柳 1 回完結型 関係性

1. はじめに

筆者は 2016 年の 2 月から 3 月にかけて 17 日間 SEND (Student Exchange Nippon Discovery) プログラム¹によってインドネシアの国立パジャジャラン大学人文学部日本語学科に派遣された。筆者とともに派遣されたのは早稲田大学の学部も学年も異なる学部生 5 人であった。派遣の 5 ヶ月前から派遣後まで実践について 6 人で対話を重ねた。渡航前教育については鈴木 (2015) を参照されたい。

パジャジャラン大学はインドネシアの高等教育機関で日本語教育を最初に開始した大学であり、SEND プログラムでも 2013 年のパイロット・プロジェクトから数えて、本派遣は 4 回目の受け入れであった。教壇実習の他にも TA、課外活動、文化交流祭等、活動の場が用意されていた。本稿では筆者が担当した「川柳」の実践について報告する。

2. 実践の概要

2.1 実践の背景

「川柳」をトピックに選んだ理由は 3 点ある。1 点目は、新たな日本語を教授するというよりも、これまで学んできた日本語を使って、新しい表現活動に挑戦することに意味があると考えたからである。海外で日本語を学ぶ学習者は、生活で日本語を必要とする場合は非常に少なく、教室を離れると日本語に触れる機会も少ない。そのため、授業で様々なこ

とを吸収しても、表現する機会は少ないと考えた。また、外国語教育に詩歌を取り込むことは動機付けや楽しみ、目標言語の理解を深めるという効果がある（黒川 2008）。この実践は1回完結型の実践であり、同世代の学生という立場から考えた時、互いに楽しむことのできる実践を目指した。2点目に、川柳がどのようなものなのか、また、基本のルールがわかれば、どのレベルの学生でも作ることが可能であると考えた。トピックを決める時点で、どの学年の、どのクラスで実践を行うかが決まっていなかった。そのため、どんなレベルでも汎用することができるトピックを考える必要があった。川柳は、学年を問わず、クラス内の学習者のレベル差も問わず実践を行うことができると考えた。3点目に、日本語の音への意識化である。パジャジャラン大学が位置するジャティナンゴールは地方都市であるバンドンからさらに車で1時間かかる町である。特殊拍（長音・拗音・促音・撥音）は学習者にとって聞き取りや発音が難しい音である。そこで、接触場面の少ないJFL環境下での川柳は特殊拍の確認と発音の意識化につながると考えた。

以上の考えに基づき、実践で定めた目標は以下3点である。

- ① 日本文化の1つである川柳を知り、川柳をつくるおもしろさを体験してもらう
- ② 日本語の音への意識化を図る
- ③ これまで学習してきた日本語を使って自分の気持ちや想いを表現してもらう

2.2 実践の日程

川柳の授業は2年生の日本語表現演習の2クラスと4年生の日本語教育実習、観光ガイド向けの日本語クラスの計4クラスで行った。各クラス90分²×1コマの1回完結型の実践である（表1参照）。実践は派遣の最終週に配置されていたため、実践の前に各クラスの授業にTAとして参加し、クラスの参与観察を行った。

表1 パジャジャラン大学における川柳の実践

日時	学年	クラス	人数
2016/3/7 9:30-11:00	4年生	日本語教育実習	44人
2016/3/8 7:30-9:10	2年生	日本語表現演習A	25人
2016/3/8 9:20-10:50	4年生	観光ガイド向けの日本語	50人
2016/3/8 12:30-14:10	2年生	日本語表現演習B	27人

3. 川柳の実践

実践は3人（筆者と学部生2人）で行うチームティーチングで、もう一つのチームの3人はTAとして参加した。授業は基本的にプロジェクターを使用し、PPTで進めた。

3.1 授業内容

3.1.1 川柳とは

川柳とはどのようなものかを考えてもらうために、川柳のサンプルを3つ同時に提示し、その中から共通点を見つけられるよう図った。学習者が「5・7・5」という共通点に気づいた後、その川柳で詠われている内容を写真と絵を用いて確認し、川柳の雰囲気を感じてもらった。

3.1.2 川柳と俳句

世界的に日本の俳句は認知度が高く、同じ5・7・5音でも川柳は認知度が低い。実際に担当クラスでは、多くの学生が俳句のことは知っていたが、川柳のことは知らなかった。川柳を学習するために、俳句との代表的な違いを知る必要があると考えた。そこで俳句の特徴である①季語、②文語体、③感じ、に焦点をあて川柳と比較し理解を深めていった。

①季語： ドリアン（雨季）・お正月（冬）・ひなあられ（春）

季節を表す言葉として、学習者がどの季節のことを表す言葉なのか分かるインドネシアの季語と日本の季語を選定し提示した。その土地の人が持つ共通認識の季語を取り入れることが、感覚的に一番わかりやすいと考えたためである。

②言葉： ひな祭り 男の子も 楽し 祭りなり

この俳句の例も実際に前の週に体験した、ひな祭りを題材にした。この例から、いつも使用している日本語との違いについて考えた。口頭でのやり取りの中で、違いに気づくとともに、どこにどのような違いがあるのか視覚的に示すため、変化する箇所は色を変え、現代の表現を古語と対比する形でその下にアニメーションで示した。

③感じ： 導入時に挙げた例を使用し、川柳はおもしろく、ジョークも込められていて自由な感じであり、俳句は川柳よりきまりが多く、自由度が少ないという説明をした。

以上、川柳と俳句の違いを理解した上で、長音、拗音、促音、撥音が含まれている多様な川柳をPPTで示しながら、一つひとつ「音」の数え方を説明した。「音」をカウントする際は、一緒に手を叩きながら、リズムを体に刻めるようにした。

3.1.3 練習の工夫

限られた時間内に川柳を完成させることができるように、2つの異なる練習を行った。

1) 穴埋め川柳

まず、「音」の数え方を確認するとともに、川柳の考え方を体感できること、苦手意識をもたないようにすることを目的に、穴埋め川柳を行った。俳句や川柳は一見「難しい」と思われがちである。そのため、「誰でも作れる」「難しいものではない」という意識を形成するため提示したものの1つは以下のものである。

おいしいよ おすすめ料理 ○○○○

例として、学食の人気メニュー「ナシゴレン」を挙げると、学習者から次々に5音の食べ物の名前が出てきた。また、「おすしです」という例も出すことによって、名詞の5音に限らないということも示した。この練習はクラスの全体活動として、挙手した学生や聴いた学生の発話を拾い、クラス内で共有した。

2) 5音7音の言葉探し

次のステップとして、同じく川柳作成の上で大切な「音」の数え方を理解しているかど

うかの再確認をすること、自主制作の前のウォーミングアップをねらいとし、5音7音の言葉探しの練習を行った。4、5人のグループに分かれ、日本語で5音（2回目は7音）のものを制限時間内にできる限り多くノートに書き出していった。グループ活動にすることで、グループ内で5音と7音についての知識を再確認することができ、個々に最も難しいと思われる長音、拗音、促音、撥音の「音」の数え方が認知された。また、時間の制限を設けることでゲーム感覚にすることができ、学習者の参加意識が高まった。制限時間後には、各グループで見つけた言葉を代表者が発表し、クラス全体に語彙の共有を図った。

3.1.4 川柳の作成

2つのパターンの練習を踏まえ、各自川柳作成に取り組んだ。作成の前に、作品として短冊を作ることをアナウンスした。短冊の例をPPTで示し以下、要点を挙げた。

- 1) 縦書き 2) 左下に名前を書く 3) 配置のバランス
- 4) 筆ペンを使用 5) 短冊は1人1枚限り

短冊を作成する目的は、作品として形に残すことと、他者が作品を鑑賞できるようにするためである。短冊用紙は、白黒印刷で、枠と和柄が入ったものを用意した。少しでも本物の短冊気分を味わってもらうためである。また、学生の多くは筆を使用した経験がない。そこで、筆ペンを使用し、筆の感覚も体験できるようにし、作品により味が出る効果を期待した。作成後は、任意でオリジナルの川柳を発表してもらい、その川柳の背景にあることや、その川柳の意味を説明してもらい、学習者間で川柳を楽しんでもらった。作品としては、好きな人のことを詠う恋愛ものが多くみられた。作品が仕上がった後は、自身の作品や友達の作品を携帯電話の写真機能で記録している学習者が多く見られた。作品は授業後、クラス作品として大きな模造紙に貼り付け、書道クラブの教室に展示した。

3.2 学習者への影響

授業後、振り返りシートを配布し、この「川柳」の授業から何を学んだかを学習者自身が振り返る時間を設けた。「インドネシアにも川柳のようなものがあるけど、ちょっとちがう」と、インドネシアの文化と比較していたり、「川柳を初めて聞いて、最初はむずかしいと思ったけど、書いたら、おもしろくなった」と、実際に自分で作ってみてから川柳に対する考え方が変容したことに気がついた学生もいた。

また、授業に対する学生の反応は好評であった。「今から川柳をもっと作りたい」「次は俳句のことを知りたい」「今日の授業は本当に楽しかった」などの意見が多くみられた。このように大半の学生にとって川柳を通した表現活動は興味が持てるものであり、日本語学習の意欲を向上させるものと考えられる。

さらに数日後、数名の学生がSNS（Facebook, Instagram, LINE）を通して、川柳を作成し、それにまつわる写真とともに発信していた。ハッシュタグには「#今日の川柳」と記されており、タイムリーな出来事を川柳で表現している。日常生活の中で感じていることを気軽に川柳にし、SNSで友達と共有する行為は、この実践に参加しなかった人にも「川柳」というものを広げているといえよう。

4. おわりに

この実践は言語能力が飛躍的に向上するといった性質のものではなく（黒川 2008）、さらに 1 回完結型の実践で、川柳の深いところに込められる皮肉やユーモアのことがどのくらいの学生に伝わったかはわからない。しかし、最も印象的であったことは、通常の授業とは異なる本実践に積極的に参加する学習者の姿勢である。それは、本実践にパジャジャラン大学日本語学科の学生が日本人学生と関わることにより、日本に対する興味関心のひろがりや、日本語学習意欲を向上させる効果（アグス 2015）があったことが示唆される。しかし、それは決して、本実践のみで形成されたものではないと考える。筆者たちが派遣されてから実践までの間に、学生同士が様々な交流をし、同じ時間を過ごし、互いに関係性を築いたうえで行った実践だったからであろう。

同じ学生という立場での本実践は非常に貴重な機会であり、今後このような機会があるかといえば、可能性は少ないだろう。しかし、教師という立場で実践を行う場合にも、学習者との関係性を築きながら実践を考えていきたい。

注

- 1 SEND プログラムは、2012 年に早稲田大学日本語教育研究科と日本語教育研究センターによって文部科学省に世界展開力強化事業として共同申請され、採択されたプログラムである。ASEAN 諸国の 10 大学と早稲田大学が協働し、多様な日本語学習者に対応できる日本語教育者および実践的日本語運用能力を身につけることを主眼としている。本派遣は早稲田大学の大学院生ならびに学部生に対し、海外で日本語教育の現場に携わる機会を提供する実習科目であった。プログラムの事業枠組に関する詳細は、宮崎・川上（2015）を参照されたい。
- 2 学校のイベントや会議などにより、短縮授業になったり開始時間が変更したりしたため、若干実践の時間が異なった。

参考文献

- アグス スヘルマン スルヤディムリア（2015）「SEND プログラムによって期待される効果及び今後の日本語教育への展望—パジャジャラン大学の場合」『早稲田日本語教育学』18、pp. 15-22
- 黒川直子（2008）「定型詩を使った日本語教育—四技能の向上を目指して」Kurokawa, N. (2008) *Pedagogical Use of the Fixed-form Verses in the JFL Instruction. proceedings of the 23rd SEATJ conference. (Academic Article)*
- 鈴木伸子（2015）「SEND 海外実習における派遣チームの変容とメンバーの成長」『早稲田日本語教育学』18、pp. 9-14
- 宮崎里司・川上郁雄（2015）「SEND プログラムを通して求められる日本語能力とは—日本語教育とグローバル化」『早稲田日本語教育学』18、pp. 1-8

（かたやま めぐみ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）